

平成二十五年 度 国 語 問 題 用 紙

注 意

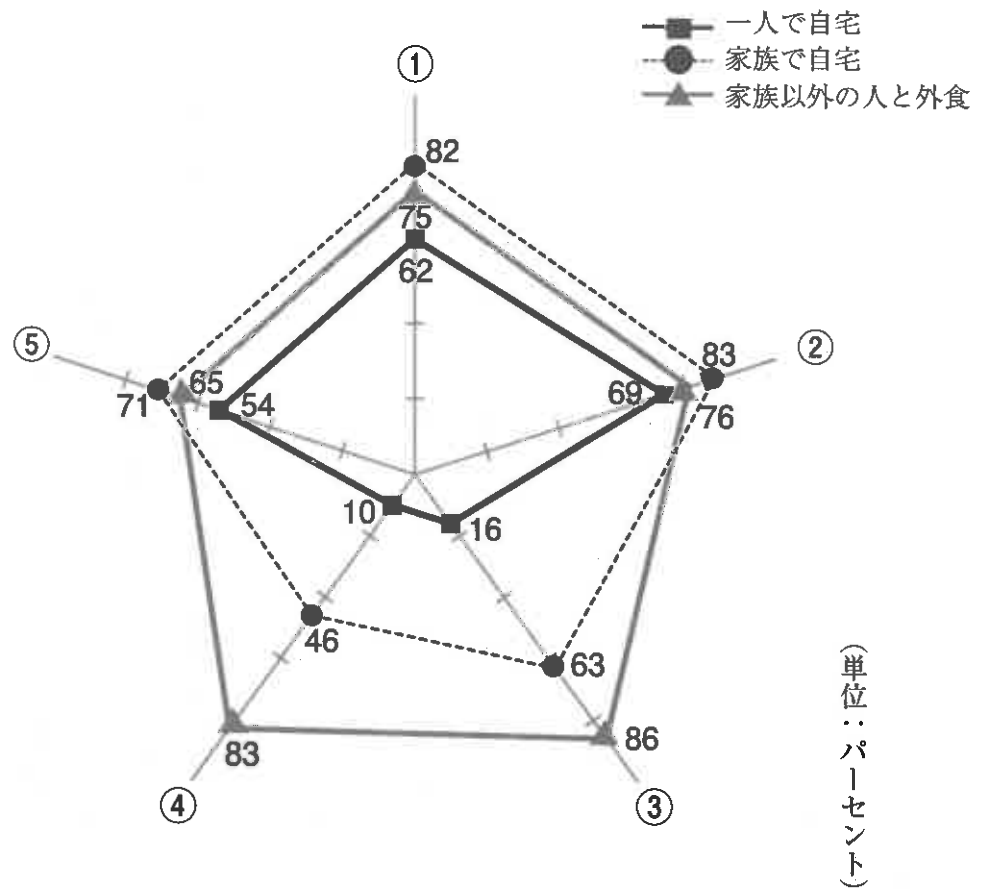
- (1) 放送による指示があるまでは、問題用紙に手をつけてはいけません。
- (2) 「やめ」といわれたら、すぐにやめなさい。
- (3) えんぴつまたはシャープペンシル、消しゴムだけを机の上に出しなさい。
- (4) えんぴつや消しゴムなどを貸したり借りたりしてはいけません。
- (5) 何か質問があるときや物を落としたときは、声を出さずに静かに手をあげなさい。
- (6) 解答用紙は、机の中央に置いて書きなさい。
- (7) 問題は【一】から【三】まで、16ページあります。

答えを書くときの注意

- (1) 答えは、解答用紙の示されたところに、はっきりと書きなさい。わくからはみだしたり、読みにくい字を書いたりしてはいけません。
- (2) 答えは、とくに示されているほかは、問題の後にあげてある中から一つだけ選んで、ア、イ、ウ……などの記号で書きなさい。

【一】放送を聞いて、後の問いに答えなさい。

夕食の感想と食べた相手



(1)

ア 家族と一緒に食事をした人の食事が多くなりがちなのは、料理をつい大量につくりすぎてしまうからである。

イ 「楽しさ」や「にぎやかさ」といった食事の場面での雰囲気は、「おいしさ」や「量」の面での満足感をも左右している。

ウ 一人きりで食事した場合、なぜあまり楽しくなかったりにぎやかでなかったりするの、その理由ははっきりしていない。

エ この調査では、毎日の夕食を、いつも、だれと、どのようにしているかという、日本人の生活習慣について調べようとしている。

(2)

ア 「にぎやかさ」と「楽しさ」の観点についてプラス評価の割合が最も高いのは、家族以外の人と外食した場合である。

イ 家族以外の人と外食した人の方が、家族とともに自宅で食事した人よりも、くつろいで、おいしく食べられたと感じている。

ウ 一人で食事をした人よりだれかと一緒に食事をした人の方が、五つの観点すべてにおいてプラス評価の割合が高くなっている。

エ 「おいしさ」「量」「くつろぎ」の観点は、他の観点と比べて、だれと、どこで食事をとったかによって評価が左右されにくい。

メモ

「二」次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「私」は、父が大家をつとめるさびれたアーケード（商店街）で生まれ育った。父は自宅の一階を、アーケードのお店のレシートを見せれば誰でも一休みすることが出来る場所に改造し、「読書休憩室」と称して、百冊ほどの本と魔法瓶に入ったホットレモネードを用意した。

私が読書休憩室にいれば、父は安心して読んだ。本さえ読んでいれば子供は安全である、という固い信念を持っていた。二人きりの生活の中で、幼い娘の安全をどう守るか父にとつて重要な問題だった。本のページをめくっている間、子供はふらふら出歩かず、じっと座っている。よつて迷子になったり、車に轢かれたり、友だちと喧嘩をして泣かされたり、泣きすぎてひきつけを起こしたりする恐れがない。①薄っぺらなペー
ジの中に隠れた人物たち、セーラやニルスやチルやミチルほど親身になって我が子を守ってくれる者は他にいない。そう信じていた。

父が仕事をしている間（大家というのがどういう仕事なのか私には分からず、店主たちと比べて父が働いているように見えた）、私はずっと読書休憩室にいた。背もたれにチューリップの絵が描いてある塩化ビニールの椅子に腰掛け、一心に本を読んで過ごした。路面電車が走り過ぎてガラス戸がガタガタ鳴っても、レシートを持ったお客さんが入ってきても気にならなかった。それでも時折、顔を上げて、父の姿を探した。父は中庭のテーブルに書類を広げて何か難しそうな顔をしているか、どこかの店先で店主と談笑しているかした。その様子を確認すると再び私は、本の世界に戻った。

Rちゃんは唯一、レシートなしで読書休憩室に出入りできるお客さんだった。厳密に言えばレシートを持っていないのだからお客ではないのだが、彼女にはそういう細かいことを気にさせない妙なふてぶてしさがあり、子供用ビニール椅子にその姿を認めても、アーケード中誰も注意を払う人はいなかった。当然な顔をして、大胆に、彼女はそこに座っていた。

けれど決して、私たちは友だちではなかった。学校の教室で彼女は無口だった。キヤーカー言つてふざけたり、女の子同士手をつないで廊下を歩いたり、交換日記をやり取りしたりするのが好きではないように見えた。いつでも堂々と、一人ぼっちでいた。私たちが遠足へ持ってゆくお菓子や、三つ編みを結わえる色つきゴムについて悩んでいる間、Rちゃんだけは一人、他の誰も思い及ばないような事柄、例えばイグアナド

ンの親指の形について、あるいは空気圧縮機の構造について、考えているかのようだった。

「どうしてあなた、うそのお話ばかり読んでるの？」

だから 読書休憩室でRちゃんから話し掛けられた時は、驚いて上手く返事ができなかった。

「どうしてつて言われても……」

私の戸惑いなど頓着せず、彼女は「あしながおじさん」の表紙にちらりと目をやり、

「どうせハッピーエンドなんでしょう？ あしながおじさんは若くて格好よくてお金持ちで、そのうえ主人公の女の子にプロポーズするのよ」

と言った。

「えっ……」

更にRちゃんは畳み掛けてきた。

「こっちの女の子は先生の虐待に健気に耐えて、最終的にはダイヤモンド王の遺産をたっぷり相続するし、こっちの男の子は手に負えないはずらっ子で小人にされちゃうけど、そのおかげでガチョウに乗れて、いつの間にか利口な少年になってるの。それでこっちの……」

「駄目。それ以上は言わないで。まだ読んでないんだから」

慌てて私が制止すると、「ふうん」と言つてようやく口をつぐんだ。

放課後、家の鍵とハンカチとちり紙を入れた手提げ袋を持ち、ほとんど毎日Rちゃんはやって来た。手提げ袋には彼女の横顔に似た少女の姿がアップリケで縫い付けられていた。読書休憩室で彼女は、学校とは全く別人のようにお喋りで、お節介で、生き生きとしていた。そこにたどり着いて、ようやく自分が吸うべき空気をとらえ、思う存分呼吸しているかのように見えた。手提げ袋を椅子の背もたれに引っ掛け、両手が自由になると同時に、彼女の心も解放されるのだった。

父が廃材で作った丸テーブルを間にはさみ、私はチューリップ、Rちゃんはひまわりの模様の椅子に座って二人は日が暮れるまで一緒に過ごした。③おやつを分け合つて食べ、喉が渇けばホットレモネードを飲み、しまいは胸焼けしてくるのが常だった。お互い区切りのいいところまで来ると、登場人物の性格について議論したり、ストーリー展開を批判したり、次に読む本をアドバイスし合ったりした。驚くべきことにRちゃんは私が読む本のすべてを既に読破しており、どんな細かい場面でも、ついさつき読み終

えたばかりなのかと思うほどに鮮明に記憶していた。そしてたいてい、私がうつとりする物語に限って、手厳しい言葉を浴びせた。

「ご都合主義」「甘ったるい」「軽薄」「気負いすぎ」。

Rちゃんは難しい言葉をたくさん知っていた。「ごつごうしゅぎ、って何？」と、私は尋ねなければならなかった。

どんなに親しく口をきくようになってからも、学校では知らん振りのままでいた。目配せさえ交わさなかった。そうしてお互い、^④読書休憩室での秘密を守るための約束を、暗黙のうちに了解し合った。学校で一度でもそのことを口にしたら、もう二度と読書休憩室には入れないのだ、と二人とも固く信じた。

私が 1 を好むのに対し、Rちゃんが求めるのは 2 だった。趣味が異なるおかげで本の取り合いにならずにすんだ。中でも彼女が最も愛したのは、百科事典だった。

それはいつかアーケードに現れたセールスマンから父が買った、十冊セットのカラー豪華本で、子供一人の力では本棚から取り出せないくらい重かった。とても高価だったのだが、百科事典を背負って歩き回り、疲れきって気弱になったセールスマンを父が気の毒に思い、無理をして月賦で購入したのだった。

Rちゃんは第1巻「あいう」の最初のページからスタートし、第2巻「えおか」、第3巻「きくけ」と順番に読んでいった。気紛れを起こして巻の順番を変えたり、つまらないページを飛ばしたりするような真似は決してしなかった。几帳面に、根気強く一ページずつめくっていった。彼女に言わせれば、百科事典につまらないページなど一切存在しない、ということらしかった。

〈中略〉

あれはどういうつもりだったのだろう。読書休憩室での過ごし方に変化をもたらすためなのか、ただ単なる気紛れからなのか、時折Rちゃんは声に出して百科事典を読むことがあった。読み聞かせる相手は私ではなく、まだ子犬のベベだった。^⑤犬に百科事典を読んでもやるにはどういうやり方がいいか、彼女はよく心得ていた。ベベが他の犬より多少お利口だとすれば、それはRちゃんのおかげかもしれない。

「アッピア街道　ローマから南イタリアに540kmにわたってのびる古代ローマの幹線道路。紀元前312年に、ローマの監察官アッピウスにより建設されたことからこの名がついた。主に軍用道路としてつかわれたが、ギリシャとの交易路としても大きな役割をはたした。沿道には史跡が多い。舗装の一部はのこっており、現在もつかわれている

……」
ベベはRちゃんの足の間に体を納め、お腹を全部床につけ、気持ちよさそうに目を閉じているが、耳だけはりりしく立てている。その項目を際立たせる特別な数字やエピソードが出てくると、耳の先端がびくりと動く。ベベはきちんと講義を聴いている。

私はRちゃんの声が好きだった。それは小ぬか雨のようにひっそりとして、落ち着きがあり、路面電車の音にも店主たちの「いらっしゃいませ」の声にも乱されずひたひたとアーケードの中を満たしてゆく。はるか遠くから旅してくるアッピア街道を心からいたわり、余分なものは何も加えず、ありのままの姿で導いてくる。いつしか私は自分の本を閉じ、彼女の声に聴き入っている。ベベの耳は一段と研ぎ澄まされ、産毛の生えた内側の皮膚がうっすらと赤らんでいる。Rちゃんの声に包まれながら、私たちはアッピア街道をどこまでも歩いてゆく。石畳は固く、白っぽく磨り減り、馬車の車輪の跡が窪みになっている。あたりにはオリブの林が続き、木々の間から、崩れかけた石造りの要塞や家畜小屋や水道橋のぞいて見える。時折風が通り抜け、Rちゃんの手提げ袋と私の髪の毛を揺らす。ベベははしゃいで走り回り、私たちを追い抜いては振り向き、後戻りしてはまた追い抜いて、ひとときもじっとしてられない。空は信じられないくらいに青い。初めて見る空のはずなのに、なぜか私たちは懐かしい気持ちに浸っている。街道はまだまだ遠くまで続いている。

「早く、全部読み終わりたいなあ」

心の底からそう願うように、Rちゃんは言った。

「まだまだ、先は長いね」

どっしりと本棚に並ぶ百科事典の背表紙に、私は視線を落とした。Rちゃんはまだまだうやく第4巻に差し掛かったところだった。

「ねえ、見て。第5巻は「し」。し、一文字で一つの巻全部だよ。凄くない？」

「うん」

何が凄いか自信が持てないまま、私はあいまいに返事をした。

「この世界では、し、ではじまる物事が一番多いの。し、が世界の多くの部分を背負っているの。この、釣り針みたいな頼りない一文字が、実はひそかに一生懸命がんばってくれているんだよ。いいえ、自分は決して何の役にも立ってはおりません、みたいな顔をしてね」

労をねぎらうように、彼女は第5巻の背表紙の「し」を撫でた。

「でもね、だからと言って他の文字をないがしろにしているわけじゃないの。第10巻。栄

光の最終巻。「むめもやゆよりるれろわん」。む、から、ん、まで全部で十三文字だよ。十三文字が仲良く手をつないで、十分の一の役目をしつかり担^につて。それが、し、と比べて劣^{おと}る役目だとは、私は少しも思わないよ」

⑥ うん、そうだ、確かにそうだ、と私はうなずいた。べべも尻尾^{しっぽ}を揺らして床を^{ひとは}掃きし、同意を示した。

「ああ、最後の、ん、はどんなふうになってるんだろう」

Rちゃんはガラス戸の向こう、アーケードの偽^{にせ}ステンドグラスを突き抜け、アツピア街道を通り抜けたもつと遠くのどこかを見つめて言った。そこを見つめ続けていると、最後の、ん、が支える世界の欠片^{かけら}が浮かび上がってくる、とでもいうかのようなだった。私とべべは彼女の邪魔^{じゃま}にならないよう、じっと大人しくしていた。

(小川洋子「最果てアーケード」による)

注 *1 塩化ビニールⅡプラスチックのような素材。

*2 イグアノドンⅡ恐竜^{きょうりゆう}の名前。

*3 アップリケⅡ布地の上に模様を切り抜いた小さな布をぬいつけたもの。

(1) — 線部①「薄っぺらなページの中に隠れた人物たち、セーラやニルスやチルチル

やミチルほど親身になって我が子を守ってくれる者は他にいない」とはどういうことですか。この部分を説明したものとして最も適当なものを、次の中から選びなさい。

ア 個性的で愉快^{ゆかい}な登場人物たちが活躍^{かつやく}している本のあたたかな世界が、母親の代わりとなって「私」をやさしく育ててくれているということ。

イ さまざまな空想をふくらませることができる物語こそが、危険に満ちた現実世界を生きぬくための知恵^{ちえ}を「私」にさずけているということ。

ウ 目には見えない本の登場人物たちの魅力^{みりょく}が、「私」を本の世界に引きこみ、現実の世界で危険な目にあわないようにしているということ。

エ 現実の社会の人間たちは「私」を危ない目にあわせようとするが、本の登場人物たちは逆にさまざま危険から守ってくれているということ。

(2) — 線部②「読書休憩室でRちゃんから話し掛けられた時は、驚いて上手く返事ができなかった。」とありますが、このとき「私」が「驚いて上手く返事ができなかった」のはなぜですか。最も適当なものを、次の中から選びなさい。

ア ふてぶてしい態度で親しみにくかったRちゃんが、突然^{とつぜん}「私」の好きな本に興味を示してきたから。

イ いつもは無口で「私」にも無関心だったRちゃんから、いきなり傷つくようなことを言われたから。

ウ 読書休憩室に一緒にいても友だちにはならなかったRちゃんが、親しげな口調で話しかけてきたから。

エ 思いもよらないことを一人で考えているようだったRちゃんから、不意に意外な問いかけをされたから。

(3) 線部③「おやつを分け合って食べ、喉が渴けばホットレモネードを飲み、しまいは胸焼けしてくるのが常だった。」とありますが、こうした二人の様子から、作者はどのようなことを表現しようとしているのですか。最も適当なものを、次の中から選びなさい。

ア 読書休憩室で本を読むだけでなく、おやつを食べることで二人の仲が深まってきていたということ。

イ 読書休憩室で長い時間を過ごすうちに、二人とも本にあきて息苦しく感じられていたということ。

ウ 読書休憩室で本を読む長い時間が、互いをわかり合うような二人の友情を育てていたということ。

エ 読書休憩室で二人だけで過ごすときは、本来の自分たちにもどつてのびのびとできていたということ。

(4) 線部④「読書休憩室での秘密」とは、どのようなことを指していますか。最も適当なものを、次の中から選びなさい。

ア 「私」とRちゃんは、読書休憩室が子供だけで自由に過ごすことができる場所であるを知っているということ。

イ Rちゃんが本当は学校のみんなとも仲良くなりたいたい気持ちを持っていることを、「私」だけは知っているということ。

ウ 「私」が好きな物語に手厳しい言葉を浴びせるRちゃんは、実は誰よりもそれらの物語を読みこんでいるということ。

エ Rちゃんは学校ではいつも一人ぼっちだが、読書休憩室では「私」といきいきとおしゃべりする仲なのだということ。

(5) 1 2 に入る語句の組み合わせとして最も適当なものを、次の中から選びなさい。

ア 1 子供のお話 2 大人のお話

イ 1 うそのお話 2 本当のお話

ウ 1 やさしいお話 2 難しいお話

エ 1 おもしろいお話 2 つまらないお話

(6) 線部⑤「犬に百科事典を読んでやるにはどういうやり方がいいか、彼女はよく心得ていた。」とありますが、「私」がこのように思ったのはなぜですか。最も適当なものを、次の中から選びなさい。

ア ベベが、Rちゃんの話す百科事典の内容を理解しながら熱心に聞いているように見えたから。

イ ベベが、Rちゃんの声のふしぎな力によって想像力豊かな犬になっているように見えたから。

ウ ベベが、Rちゃんの話聞くたびに言うことをよく聞く賢い犬になっているように見えたから。

エ ベベが、Rちゃんの講義を聞くことでたくさんの知識を身につけていつているように見えたから。

(7) 〇で囲んだ部分では、どのようなことが、どのような工夫によって表現されていますか。それを説明したものととして最も適当なものを、次の中から選びなさい。

ア Rちゃんの声を聞きながら、「私」がRちゃんの心に広がる世界をまるで自分が経験したできごとのように感じていることが、記憶の中の景色をあざやかに描くことによって表現されている。

イ Rちゃんの声を聞くうちに、「私」がRちゃんやベベと一緒に百科事典の世界を体験しているような感覚になっていくことが、細やかに情景や様子を描写することによって表現されている。

ウ Rちゃんの声を聞くうちに、「私」が現実の世界を空想上のふしぎなできごとに変えていくことが、時間とともに移り変わる「私」の気持ちをしていねいたどることによって表現されている。

エ Rちゃんの声を聞きながら、「私」が自分だけの世界に入りこんで心地よい気分になっていることが、美しい情景の描写や「私」の心を感じ取ったベベの楽しげな様子によって表現されている。

(8) — 線部⑥「うん、そうだ、確かにそうだ、と私はうなずいた。」とありますが、このとき「私」はどんな気持ちで「うなずいた」のですか。最も適当なものを、次の中から選びなさい。

ア 百科事典の一つ一つの巻に対するRちゃん独特の考え方を理解し、Rちゃんを応援する気持ちをこめて懸命に同意している。

イ 百科事典に対するRちゃんの関心の強さにはとまどったが、Rちゃんの熱心な言い方につられるように思わず同意している。

ウ 百科事典のすべての巻にわたるRちゃんのはば広い知識に感動し、中でも最終巻の意味が大きいことに共感して同意している。

エ 百科事典の中の文字の一つ一つにまでRちゃんが豊かに愛情をそそいでいることを感じ、Rちゃんの考えに心から同意している。

(9) 「私」のRちゃんに対する気持ちや態度は、この文章の中でどのように変化していますか。最も適当なものを、次の中から選びなさい。

ア 初めはRちゃんの言動にとまどっていたが、本を通じて親しくなるにつれてRちゃんの知識の豊かさに感心し、彼女の世界を大切に思うようになっていく。

イ 初めはRちゃんのぶっきらぼうな態度になじめなかったが、読書休憩室で一緒に過ごすうちに、そこがRちゃんのよいところだと考えるようになっていく。

ウ 初めはいつも一人でいるRちゃんに親しめなかったが、Rちゃんの朗読を聞くうちに、最後まで一緒に百科事典を読みたいと感じるようになっていく。

エ 初めは物語のことをけなすRちゃんのことばに圧倒されていたが、しだいに「私」も反論できるようになり、対等な読書仲間として見るようになっていく。

【三】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、①～⑨は段落の番号を示しています。

①植物たちは、有毒物質を身につけていれば、動物に食べられる被害から逃れられるでしょう。このことは、理屈の上では、よく理解できます。しかし、「実際に、自然の中で、そんな現象が見られるのだろうか」という疑問があります。

②その疑問に答える二つの例を紹介しします。一つは、奈良公園で知られているものです。奈良公園にいるシカは、放し飼いにされていて、公園内の草や木の葉っぱを自由に食べます。奈良公園のシカがトゲの少ないイラクサを食べるために、トゲの多いイラクサだけが生き残っていることを前の章で紹介しました。しかし、シカに食べられないように工夫している植物はそれだけではありません。じつは、「奈良公園には、アセビが多い」といわれます。

③アセビは、庭木として植栽されることが多い植物です。春早くに、白色やピンク色の花を房のような状態で咲かせるツツジ科の植物です。漢字では、「馬酔木」と書かれるように、「ウマがこの植物の葉っぱを食べると酔ったようになる」といわれます。

④「酔う」という字が使われるので、お酒の好きな人は、「ウマが気持ちよくなっている」とうらやましく思われるかもしれません。しかし、そうではありません。「A」状態になっている」というのが適切な表現です。

⑤この植物は、「アセビ」とよばれることもあります。「この『シビ』は、『しびれる』状態を強調している」といわれます。アセビには、「アセボトキシシン」や「グラヤノトキシシン」とよばれる有毒物質が含まれており、決してウマだけに有害なものではありません。だから、奈良公園のシカも食べず、その結果、公園内にはアセビが多く育っているのです。

⑥有毒物質で食害から身を守っているもう一つの現象が、奈良県御杖村の「三峰山」で、知られています。ここは草原には、かつて、リンドウやオミナエシなど、いろいろな植物が生育していました。しかし、近年は、「トリカブト」の仲間、「カワチアブシ」がほかの植物にかわって繁殖しています。

⑦カワチアブシは、「河内附子」と書かれます。「河内」は、この植物の自生地の大坂府の地名で、「附子」は、トリカブトの根を乾燥した生薬の名前です。この名前が使われるように、この植物は、トリカブトと同じキンポウゲ科の植物で、美しい花を咲かせ、トリカブトと同じ猛毒の「アコニチン」を含んでいます。

⑧この山には、野生のニホンジカが生息しており、草を食べています。カワチアブシは、

猛毒をもつため、ニホンジカに食べられることから逃れています。そのため、ほかの草が食べられたあとに、カワチブシが繁殖していると考えられています。

⑨このように、実際に、自然の中で、植物たちは有毒物質でからだを守っているのです。これらの二つの例は、それがきわだった現象ですが、多くの植物が、虫や鳥などの動物たちに対して有害な物質をつくって、からだを守っています。

※ ※ ※

身近にいる多くの植物が、病原菌や、虫や鳥などの動物たちに対して有害な物質をつくって、からだを守っています。身近な植物たちが有毒な物質をもっていることを知ると、「それは、特別な植物だろう」と思う人が多く、また、「そんな植物は、気持ち悪い」という人もいます。

しかし、自然の中で、植物たちは、虫に食べられることから自分のからだを守り、病原菌を感染させないために、有毒な物質をもっているのです。植物たちも、「病気になるらず、元気に、健康に生きたい」と思っているのです。

そのため、有毒物質をもつことが知られているかいないか、それらの毒性が強い弱いとは別に、多くの植物が有毒物質をもっています。ですから、「ほんとうに、身近な植物が有毒な物質をもっているのか」と疑問に思っても、そのあたりの植物の葉っぱを食べて、自分のからだで確かめないでください。もどしたり、下痢したりするはずですよ。

「有毒な物質をもっているから、気持ち悪い」などと思わず、「植物は、自分のからだを守るために有毒な物質をもっている」という植物たちの生き方を理解した上で、私たちは、植物たちと共存、共生をしていかなければなりません。昔から、そのようにして、私たちの先人は植物たちと暮らしてきました。

1、ヒガンバナを考えてください。ヒガンバナは、古くから、「毒をもつ植物」や「墓地に花咲く植物」として、あまり良いイメージをもたれていません。ヒガンバナの球根には、「リコリン」という物質が含まれています。ヒガンバナの学名は「リコリス・ラジアータ」です。このリコリンという物質名は、ヒガンバナの属名の「リコリス」にちなんでいます。かわいらしい響きのある名前ですが、この物質はよく知られているように有毒です。

リコリスは、ギリシャ神話に登場する美しい海の女神「リコリス」や、ローマ時代の女優の名前にユライ^Aするといわれます。種小名の「ラジアータ」は、「ホウシヤ

状の」という意味で、咲いた花の広がり様子を表しています。いっぽう、この植物は、墓地や田や畑の畦に育ってきました。「ヒガンバナは、勝手に生えている」と思われがちですが、そうではありません。ヒガンバナは、タネをつくら

ず、球根が増えます。だから、球根が転がる以外に、生育地を変えることはありません。

2、球根が墓地や田や畑の畦にうまく転がっていくことはありません。偶然にお墓や田や畑の畦に運ばれる土に球根が混じっていることがないわけではないでしょうが、そんなことは稀でしょう。人間がお墓のそばや田や畑の畦に植える以外にないのです。ヒガンバナの球根が有毒な物質をもつことを知っていた先人たちに、植えられてきたのです。

お墓に植えられたのは、土葬だった時代、埋葬した遺体を食べに来るモグラやネズミを寄せつけないためでした。畦に多いのは、モグラやネズミが畦を壊すことを防ぐためでした。また、「ヒガンバナの球根は、水にさらして毒を抜けば、食べられる」といわれます。そのため、「田や畑で栽培する作物が不作の年、畦に植えておいたこの植物の球根で飢えをしのぐ」救荒植物の役割があつた」ともいわれます。球根には、多くのデンプンが含まれているからです。だから、毒さえ抜けば、空腹を満たす食べ物になります。

「なぜ、イネが不作の年に、飢餓を救うほど多く、ヒガンバナの球根がつくられるのか」という質問を受けたことがあります。この理由は、イネが成長しおコメをつくる時期と、ヒガンバナが球根をつくる時期が異なるからです。イネは、春から秋まで成長し、おコメをつくります。それに対し、ヒガンバナは、秋から春までの間に、葉を茂らせ球根をつくります。だから、イネが育つ夏がひどい気候の年でも、ヒガンバナには影響がないのです。

「飢えを救うほど、多くの球根がつくられるのか」という疑問があります。でも、ヒガンバナの花が咲くころ、その根もとを掘ってみてください。球根がゴロゴロとあります。花が一本咲いていれば、その下に花の咲かない球根が約二〇個あることも珍しくありません。ヒガンバナはまとまって花を咲かせています。五〇個咲いていれば、一〇〇〇個の球根が得られます。だから、飢えを救うのに十分に役立つのです。

⑩私たちヒガンバナとの昔からの長いつきあいは、人間と有毒な物質をもつ植物との共存、共生の典型的な例です。「二世紀は、私たちと植物たちの共存、共生の時代」といわれます。私たちは、植物の生き方をよく理解して、植物との共存、共生のあり方を考えていかなければならないでしょう。

(田中修「植物はすごい」による)

注 *1 植栽＝草木を植えること。

*2 生薬＝動植物などを原料とする薬。

(1) **A** に入る言葉として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

- ア 酒を楽しんだ
- イ 毒がきかなかった
- ウ 酒で酔いつぶれた
- エ 毒にしぶれた

(2) — 線部①「馬酔木」・②「河内附子」とありますが、これらの植物の名前を漢字で紹介しているのはなぜだと考えられますか。最も適当なものを、次の中から選びなさい。

- ア これらの植物が、今も奈良県や大阪府に自生していることを説明しやすくするため。
- イ これらの植物が、動物にとって有害な物質を含んでいることを説明しやすくするため。
- ウ これらの植物が、ツツジ科やキンポウゲ科に属する身近な植物であることを説明しやすくするため。
- エ これらの植物が、美しい花を咲かせることで人々に親しまれていることを説明しやすくするため。

(3) ①～⑨を内容の上から大きく四つに分けるとすると、三つめのまとまりは何段落から何段落までですか。数字で答えなさい。

- (4) ① ② に当てはまる言葉を、それぞれ次の中から選びなさい。
- | | | |
|---------|--------|-------|
| ア したがって | イ ところで | ウ やはり |
| エ たとえば | オ また | カ しかし |

(5) — 線部③「救荒植物の役割があった」とありますが、ヒガンバナがこの役割を果たすことができたのはなぜですか。その理由を、次にあげることのほかに二つ、それぞれ二十字以内で説明しなさい（句読点も一字として数えます）。

- 球根は毒を抜けば食べられるから。
- 球根には多くのデンプンが含まれているから。

(6) — 線部④「私たちとヒガンバナとの昔からの長いつきあいは、人間と有毒な物質をもつ植物との共存、共生の典型的な例です」とありますが、どのようにして人間はヒガンバナと長い間にわたって共存、共生してきたのですか。最も適当なものを、次の中から選びなさい。

ア 人間は、ヒガンバナのもつ特性についてよく理解し、人間の暮らしにとって大切な場所に生育の場を与えてきた。

イ 人間は、ヒガンバナのもつ植物としての生き方を先人から受けつぎ、人間の生き方を考えるために役立ててきた。

ウ 人間は、ヒガンバナのもつ有毒物質について正しく理解し、虫や鳥などからそのからだを守ろうとしてきた。

エ 人間は、ヒガンバナのもつ悪いイメージにとらわれずに、その価値を見つけて人間の食料として役立ててきた。

(7) この文章の書き方の特徴を説明したものとして適当でないものを、次の中から選びなさい。

ア 理屈の上での説明にかたよることなく、毒のある植物に対して多くの人がもつ気持ちも取り上げながら、ていねいに説明している。

イ 科学的な知識だけでなく、地理や歴史などに関連する事からも適切に用いて、理解を進めやすいように説明の仕方を工夫している。

ウ 現地に出かけての調査や観察をもとにして、そこで得られた情報を整理し、それらを対比させながら自分の考えを展開している。

エ 読み手がもつであろう素直な疑問をもとにして、それに答えるための具体的な例を紹介し、順序立てて自分の考えを述べている。

(8) 文章中の **A** **ユライ**・**B** **ホウシャ** を漢字に直しなさい。（ハネやハライなどの点画もきちんと書くこと）

